

# 『良友』画報の研究とその周辺の話

## — 『近代電影史研究資料彙編』の解題を兼ねて（1）

孫 安石／鈴木 陽一／村井 寛志

中国・上海で発行された『良友』画報の共同研究を開始したのが2002年（神奈川県言語センターに登録）で、その後、2007年には『アジア遊学』第103号（勉誠出版）に『『良友』画報とその時代』の特集号を組み、2018年には孫安石・菊池敏夫・中村みどり編『上海モダン 「良友画報」の世界』（勉誠出版）を上梓することができた。これらの研究を進めるにおいて、筆者は中国の映画やカメラ、撮影などに関する論考をまとめることができたが、その後の2018年10月、中国で馬昕編『近代電影史研究資料彙編』（40冊、広稜書舎、神奈川県人文学研究所）が刊行されたことを知った。同書の「出版説明」によれば、1949年

以前の映画フィルムで現存するものは約300作品で、1930年以前の作品に至っては22作品のみで、中国の映画関連の図書、雑誌、新聞などの資料もその多くは散逸する恐れがあることから、映画理論、評論、映画技術、映画年鑑、映画館経営などに関連する資料を集め、出版することになった旨が記述されている。

中国の近現代史、または都市史研究において、1920、30年代の中国映画産業の全般に関する理解は、必修の課題であると言っても良い。そこで、この場を借りて『良友』画報の研究と映画に関連する周辺の話拾い上げ、各分冊の内容を紹介していくことにしたい。

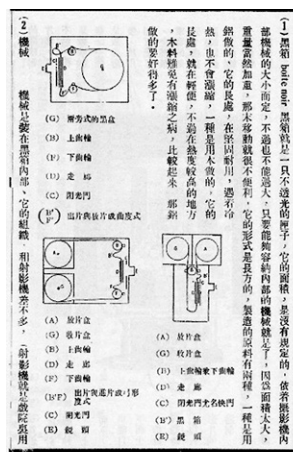
**第一冊目録**

電影講義 周劍雲等著 大東書局民國十七年（一九二八）鉛印本  
 現代電影論 楊騷編譯 中興民國二十二年（一九三三）鉛印本  
 電影藝術 殷作楨著 中國文化書局民國二十三年（一九三四）鉛印本  
 電影文學論 王平陸編著 商務印書館民國二十七年（一九三八）鉛印本

（図1 『近代電影史研究資料彙編』の第1冊目次）

### 第一冊

◎周劍雲等著『電影講義』（1928年）によれば、1924年を前後した時期の上海には「昌明電影函授（通信）学校」がすでに登場し、映画学に関連する教育を施す目的で、映画の効果、使命、種類などを網羅する講義録が組まれることになった



（図2 カメラの構造の説明、『電影講義』、第1冊、135頁）

とが分かる。これらの講義録の中には、映画の国家別特色（アメリカ、ロシア、日本など）は勿論のこと、映画監督の業務、編集作業の手順、撮影学（撮影機材、技術）などの内容が含まれている。◎楊騷編訳『現代電影論』（1933年）は、美国電影発達史、欧州電影発達史、蘇俄（ロシア）電影

---

界概論、有声電影論に構成され、映画発展の歴史において第一次世界大戦という「戦争」が技術の飛躍において大きなきっかけになったことや映画と金融資本との関係が記述されている。

◎殷作楨『電影芸術』（1934年）でとくに特徴的なことは、映画監督論を論じる「下編」で、当時の著名な監督のWilliam De Mille(ウィリアム・C・デミル)、Gecil De Mille (セシル・B・デミル)、Rex Ingram (レックス・イングラム)などの撮影

手法を紹介している箇所であろう。

◎王平陵編『電影文学論』は小説、喜劇、詩歌、伝記作品などがどのような要素を備えたときに映画の素材になりうるかを論じるものであるが、20世紀以降に新しいメディアとして登場した新聞と報告文学については、新聞の記事を丁寧に集め、事実を検証することで、映画の素材として取り上げることが可能であるのではないか、という例示が示されている。 (孫 安石 文責)

